

それぞれに子ども学がはじまる

津守 真

最近、私共の学校では、ことに幼児期に、親が一日中保育の場で過ごすことが多くなっている。それは子どもが親から離れないから一時的にそうしているのではない。親と話しているうちに、親も私共もそれがよいように思えてきたのである。

ある子どもは、家では母親と折紙を折ったり、つみきで家を作ったりしているのに、私共のところになると、流しで風船の中に水をいれて飛ばしたりするうちにあたりを水浸しにしてしまう。子どもは枠をはみ出して思い切って遊ぶことを欲しているようにみえる。母親も、家での遊びとのギャップに驚き、また、思い切って水をはねかえして遊ぶときの子どもの張り切った姿に気付いた。そして私共は、子どもが枠をこえた遊びを、母親の眼

で承認されてやることの必要について話し合った。母親も私と一緒に床を拭きながら過ごし、一緒に保育をした満足感を共有するときもある。ある日、こんな遊びを一時間程もしたあと、床に座りこんでプラスチックの組み木でさいころのような箱を作った。それを見て母親は「わたしは形をつくることを先にしてしまつて、いままで逆にしてきたのね」と言った。私は、形にならないものの中から有形のものが生み出されることに気がついたので母親に感心した。

母親も私共と一緒に一日を過ごす、私共の保育を親しく見る機会ができる。ある母親は、子どもと箱つみきを積んでいたが、自分が先に立って面白いことをしてみせることが多かった。私は子どもの後からついてゆくうちに面白いことが展開することの方が多く、どちらが善いとか悪いとかは簡単に言えない。母親と一緒に保育の場にいるときに、そのやり方を否定的に批判して見ていたら、一緒に保育する関係がつくられない。そのことは両方共に言えるだろう。それぞれがしているところにあると考えると、お互いにやりとりしながら一緒にいるのがよい。ある日、箱つみきを子どもが積んでいたとき、母親が先に思いついて、円柱形のつみきに紐をかけて斜面をころがして子どもを誘った。子どもはその誘いに従ったがその円柱形のつみぎの上に腰をおろして、母親が思っていたのとは違うやり方で遊びはじめた。それを見て母親はこの子は私が思うのとは違うように

したいのねと分かった。私は母親の工夫がきつかけになって、だれも予期しなかった遊びが、展開したことを、その場で母親に話した。子どもも、母親も、私も、お互いに十分に生きるのが保育の場である。私共と同様に、親も保育の場で私共と一緒にあって子どもと遊ぶことによって、自分自身を考え直し、子どもを再確認する。

ある日、父親が突然休暇がとれて、子どもを送ってきた。その父親がゆっくりと保育室にいたので、私が誘うと一日遊んでゆくことになった。だれにも遠慮せずと思うように過ごしてもらいたいことを最初に話し、あとは父親に委ねた。帰りがけにその感想をたずねると、家で子どもと遊ぶときは、子どもはすぐに母親に助けを求めにいくがここだと父親に頼り、父親もそのことが嬉しいとこの父親は語った。皆が思いきって遊んでいる保育の場は、父親が子どもと親しくなるのにも良い場となると思った。

ほぼ一年近く、子どもと一緒に保育室に入ってもらうことにしてきた母親がいる。それぞれの時期に、子どもと母親との関係は変化している。最初は、子どもにとって母親が必要と思えたのでそうしたのだが、母親は、私共専門の保育者以上に子どもの要求の変化をこまかく受けとめている。目下、この子どもは家では妹や家族と平穏に暮らしているのに、ここでは母親にだだをこね、無理難題をもちかけて母親を困らせるのが日課である。

たとえば、子どもがしゃぼん玉を吹いて機嫌よく遊んでいるときに、母親がもっと活気づけようと手を出して受けとったら、しゃぼん玉が破れてしまった。子どもはママがこわしたと言って、泣きわめいて母親を叩き、しがみついた。一年間の経過をみると、この子が母親にだだをこねる経験こそがいま必要なことが分かる。こういうときには、私が傍にいても、私が出る幕はない。母と子に任せておくより他ない。母親はそのことをよく知っていて、そのときには本気になって子どもとやりとりをしている。これこそが子どもにとつていま最も必要な保育である。

*

私は、十数年前に、『子ども学のはじまり』という著書を発表した。いま、そのことを思い返してみると、子ども学という専門領域があるかどうかということが問題なのではなく、子どもとかわる人の心に、それぞれなりの子ども学がはじまることを考えたいと思っていたのだと思う。その根底には、子どもの、あるいは子どもの時期の存在そのものを価値あるものとする考えがある。

子どもは大人になってゆく。けれども、今日、私共がかかわる子どもは、かかわる大人が期待する未来のために生きているのではない。今日、子ども自身が十分に生きることを求めている。それを可能にするには、いま眼前の子どもの必要とするところを見てとつて、それにこたえることが求められている。そのときに、かかわる大人は、子どもの心の

中に動いている、実に人間的な喜びや、悩みにふれる。それは大人の心の奥に共通の人間の心である。将来への不安や欲に目を奪われがちな大人の心に、神の国を、あるいは宇宙的な視野をとりもどしてくれる時がここにある。

(愛育養護学校)

